
遠き遙かなる理想へ

灯篭語り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠き遙かなる理想へ

【NZコード】

N3785M

【作者名】

灯篭語り

【あらすじ】

世界はあるひとつの革命をもつて変化を遂げた。

それは、人形が意識を持つたこと。

意識を持った人形は、時に良き隣人となり、時には恐怖の対象となつた。

人は、意思を持った人形を時には良き隣人として扱い、時に奴隸

として扱つた。

人と人形が繰りなす幻想ファンタジーです。

夕方

少女がいた。

少女は、夕空に映える紅の服を纏い、腰まで伸びる檳榔樹黒の艶やかな髪を氷色のリボンで結び、意思の強さと聰明さを漂わせる煤竹色のガラスの瞳を街道の先の巨大な水車に目を向けていた。水車は天空の頂にまで伸びようかというほどで、その大きさは常人の予想をはるかに超えていた。

山間に挟まれるようにして建っているために、全容を見ることは叶わないが、夕日を受け照らし出された姿は、悠久の時をその身に閉じ込めたかのような幽玄の美しさがあった。

大陸7大遺構の一つ、大水車リグレリア。それが水車の名だった。

少女が道路の脇で水車を眺めていると、完全に詰め込みすぎで今にも破れそうなリュックを背負い、顔に生気がまったく感じられない青年が後ろから足をふらつかせながら歩いてきた。

青年は少女に追いつくと背負っていた大型のリュックを降ろしレンガが敷き詰められた街道に崩れ落ちるようにして座った。

顔を空に向けて大きく深呼吸を繰り返している姿を少女は冷ややかな目で見ていた。

「たつた、峠一つ越えただけだろう。」

「そりゃあ、桜花にとつてみればそう見えるかもしれないけど。あのフォスカレーノ山脈をたつた3日で越えたし、予定外のことは起こつたし」

フォスカレーノ山脈はカルディアラ大陸でも有数の高さを誇る山脈で、道は険しい上に気候の変化が激しく、おまけに魔物まで出てくる、国で2級の危険地帯に指定されている場所だった。ここを慎重に通る人達は、最低5日間はかける道だった。そこをたつた3日で超えてしまったということはかなり無謀なペースであつたことに違

いはない。

「だから、あれ程普段から体を動かせといつてているのに。人の親切な忠告を無視するからそんな体たらくなんだ」

「忠告は聞いてたよ」

そう、聞いていたからこそ、旅を始める前にあらかじめ体力をつけようとしていた。だが、それでもこのままだったのだ。

もし桜花の忠告を聞き入れてなかつたならば、そばで桜花にくびくどと文句を言われ続けながら、いまだ山脈を歩き続けていたことだらう。

そう思えば、やはり感謝をしなければいけないのだろう。

「ありがとう。桜花」

夕方（後書き）

凪と桜花

「少し休む？」

「だから、少し休憩するかつて聞いているの」
「おねがいします」

桜花の突然の提案にすぐさま賛成して、道端にあつらえた様に置かれていた平らで大きな石に座った。

背負っていたリュックを大地に下ろすと肩が随分と楽になった。リュックの中に入っていた飲料水とお菓子を取り出して半分桜花に渡し、残りの半分を食べた。桜花の方を見ると頬を緩ませて小さな笑みを浮かべながらお菓子をゆっくりと食べていて、口元にはスナック菓子の食べかすがついていた。

「ん、どうかした」

桜花は左の人差し指で唇の端を触るとその意を理解したようで、頬をかすかに赤く染め、食べかすを口に含んだ。その様子をほほえましくみていた凪だったが、体に溜まった疲れが臉を重くさせる。

「桜花、ちょっとだけここで寝てもいいかな」

「30分くらいならいいよ。はい専用の枕」

ぱくぱくとお菓子をほおばりながら、右手でリュックの中から枕を探り当てて凪に手渡した。クフオーリの羽を惜しげもなく使ったこの枕は枕の中でも最上級に柔らかい。小さい頃からこの柔らかさに慣れてしまっていた凪はこの枕以外では寝付けなくなっていた。

街道沿いに群生する背の低いセルグラスの上に、ゴゴットの皮にヒメオラの油でコーティングしたシートを敷き、体を預けた。瞼を閉じると意識が閉じてゆく。

「本当、気持ちよさそうに寝るな」

すぐに寝入ってしまった凪の顔を桜花は慈しむように見ていた。凪には無理をさせすぎたかもしれない。凪はただの人間なのに、それがあまり考えていなかった。

多少は考えていたかもしぬないけれど、無意識に焦りの気持ちが生まれていた。

桜花は凪への謝罪の意を込めて、彼が目覚めるまで、手のひらや腕、ももを丁寧にもんでいった。

凪が目覚めると、心なしか体が軽くなっていた。

30分という短い時間ではあっても、やはり睡眠が効いたのかもしれない。

「さあ、いきましょうか」

桜花は凪が準備を終えるまで傍らで待つていてくれた。

「このまま凪に持たせていたら口が暮れてしまうし。持つわよ」
そう言って、桜花は凪が背負うはずだった相当な重さがあるはずのリュックを替わりに担いでくれた。

「わるい」

そう言つた凪の言葉を桜花は聞こえないふりをして街道を歩き始めた。

空は夕暮れ色が沈み始めていた。

嵐と桜花（後書き）

最後まで読んでくださった方ありがとうございました。

まだまだ、序盤ですが、少しずつ書いていきますので、よろしく
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785m/>

遠き遙かなる理想へ

2010年10月10日14時36分発行